

FUIMOS A CUBA

キューバに行ってきました。

2009年1月29日～2月5日



人間を大切にする情熱の国

キューバの旅 8日間

2009・1・29～2・5

【出発、1月29日、晴れ、Vamos a Cuba】

2009年1月29日（木）午後3時20分、成田空港第1ターミナルに集合した12名の参加者は、読売旅行添乗員の寺田さんと合流、午後5時20分にエア・カナダ002便（ボーイング777、500人乗り）に搭乗、バンクーバー経由カナダのトロント（所要時間約15時間、時差は14時間）に向けて飛び立った。

バンクーバーで、一旦飛行機から降りた時、荷物が各人に戻るのが遅れ、慌ただしく駆け足で搭乗する事態が発生。これが、次の混乱の原因となって一騒ぎとなった。

トロント空港では2時間も待っても、10人の荷物が着かない、いつ届くか分からないので、やむなく各人は、最低必要な下着やシャツなどを、空港の売店で購入して、不安な気持ちでひとまずホテルへ。添乗員の寺田さんには、夜の間中、荷物の行方を捜してもらおうが、結局解決しないまま、翌朝早くトロントから、エアバス320（200人乗り）で、空路約3時間40分のキューバの首都ハバナ（トロントとは時差はない）に向かう。

雪のトロントから一転して南国へ、上空から「緑のワニ」といわれる日本の本州の二分の一の面積（11万1000km²）のキューバ島が見えてきた。

そのハバナ空港では、うれしいハプニングが待ち構えていた。なんと、なつかしい自分の荷物が突然目の前に登場したのだ。これには一同、歓声をあげて驚き、嬉しさでいっぱい。 さあキューバ観光に出発だ！

【ハバナ、1月30日、晴れ】

現地ガイドのホセさんは、38才、妻と子どもが2人、民芸店も構えている。数年前に国費留学生として9カ月間日本に留学し、箱根細工を学んだ。その後ハバナ大学で日本語科を卒業し、今はガイド（公務員）に専念している。近頃は日本からのお客が多く、休みがとれないと嘆いている。

大型の専用バスに乗り、彼の案内で車窓からスペイン時代の建物を眺めながら、昼食をするレストラン「ラ・メール」に着く。

木漏れ日のある中庭では、クジャクがテーブルの回りを悠然と歩いていた。カメレオンが手の平に乗ってきた。レストランでは、ビールやワインでsalud（サル、乾杯）し、初めてのキューバ料理（肉や魚、黒豆ごはん）を頂く。バンドの皆さんがサルサやソンなどの歌や演奏で歓迎してくれた。

レストランの前のアルマス広場では、カストロやゲバラの演説集、社会主義関連の古本を売る店が沢山並び、また、市民オーケストラがモーツァルトの曲などを演奏し、市民や観光客が聴き入っていた。その後、カテドラル広場や旧国会議事堂（ワシントンのホワイトハウスを模している）を車窓から見学。革命広場では（内務省の壁面には、大

きなチェ・ゲバラの絵が描いてある) 革命の時にカストロたちがメキシコから乗ってきた「グランマ号」というヨット(定員10名のところに80人が乗ってきた)や戦車が展示されていた。

ハバナは、16世紀から19世紀のスペイン建物がそのまま整然と残っている落ち着いたきれいな街で、街全体が世界遺産になっている。植民地時代を通じて新旧大陸を結ぶ交易の拠点として繁栄、大聖堂や軍官区司令官公邸などのバロック建築は壮麗なものでした。300人も乗れる2台連結式のラクダ・バスや、1950~60年代のフォードやムスタングという旧式なアメリカ車が排気ガスをばらまきながら走っており、キューバの人は旧式の車を、エンジンを乗せ換えたり、幾度も塗装し、修理を重ねて愛用している。昔の映画を見ているようで、懐かしい気分になる。信号はあまりないが、しかし歩いている人を見れば、たいていの車は停車する。

うなりながら走るハバナ名物のココタクシー(ココナッツに似ている黄色の3輪タクシー、50ccのバイクを3人乗りに改造した遊園地の自動車のようなもの)にみんな分乗し、おいしいといわれる「コペリア」のアイスクリームを試食した。

夕食は、ヘミングウェイが愛したというレストラン「ラ・フロリデータ」で魚料理。店内は、観光客でごった返し、今でもヘミングウェイは、カウンターの定席に座っており、一緒に写真を撮る人もいた。彼もその雰囲気を楽しんだと思う楽団の演奏や歌が、鳴り響いていた。キューバの銘酒、ラム酒のシャーベット状のカクテル「ダイキリ」は本当においしかった。

午後9時から、世界の三大ショーの一つといわれている「トロピカーナショー」が始まるのでバスで移動。ラム酒を飲みながら、ピンと伸びた背筋、格好よい脚、豊かなお尻、堂々とした胸の踊り子たちの官能的な歌と踊りにしばし酔いしれた。最後は、観衆も、舞台上がり踊りを共に楽しんだ。世界各国から集まった千名を越える観客は、スペインとアフリカ黒人の文化が合流して出来た歌と踊りのショーを楽しんでいた。これは実際に見なければ、そのすばらしい芸術的表現は理解できないと思う。

【トリニダー、1月31日、晴れ】

今日は、気温は30℃ぐらいになるらしいが、世界遺産の街、古都トリニダーに向かう。ソ連の援助で、ハバナから第二の都市サンチャゴ・クーバまで建設予定だった高速道は、ソ連が崩壊したため、半分建設した所で中断したが、そのデコボコした高速道を時速100kmで、5時間の疾走。途中オーバーヒートやファンベルトの切断などの事故もあったが、運転手のニゲルさんは、あまり騒がないで、悠々と予備のファンベルトを取り出し、農家に水をもらい、また走りだす。なお、この大型観光バスは、ブラジル製のボルボで、マルコポーロ号という名前が付けられているが、走行距離は49万5千kmと聞いて驚いた。サスペンションは悪いが、結構頑張っている。

道路にはヒッチハイクをやる観光客や地元民が大勢、手を挙げて待っている光景には驚く。この頃は、紙幣をかざして車を停めるらしい。「この国の主な交通手段は何ですか」と聞くと、ホセさんは、「バス(1日に何台かは走っている)とヒッチハイクです

(政府管理の青ナンバーの車は、なるべくヒッチハイカーは乗せるように決められている)」との答えにはもう一度聞き返したくらいだ。

沿道にはサトウキビやオレンジ、バナナ等が植えられた畑や、米の水田が地平線まで広がり、その中には、宇宙船のような形の給水塔が点々と続いている。至るところで牛や馬が放牧されており、「痩せた堅い肉のキューバの牛」が悠々と草を食べていた。

キューバ島は、かつてメキシコのユカタン半島からアメリカのフロリダ半島にかけて陸続きだった。強いアルカリ性の石灰岩大地の島で、大部分は標高100Mも越えない平坦地が地平線まで続いている。海洋性亜熱帯気候のため、冬季でも平均気温は22℃でしのぎやすく、サトウキビや米は2期作もできる。大きな刈り取り機械でのサトウキビの収穫作業を見せてもらったが、ソ連の崩壊後は、石油やトラクターの部品が調達できなくなり、農場の土地管理は、一般的には牛が使われており(牛耕)、馬に乗ったカーボーイハットの農民が高速道を行き来している。

午後トリニダーに到着、街全体が世界遺産。レストラン「エル・ヒグエイ」で例によって歌と演奏付きの昼食。ここは、スペインが16世紀に建設を始め、18世紀、黒人奴隷制度のもと、砂糖プランテーション全盛時代に最も栄えた街。

丸い石の石畳の坂道が続くマルティン公園周辺4kmの歴史区域は、車両全面禁止となっている。砂糖王イスナガが建てた建物を見学。内部は、贅を尽くした今も使えるような、マホガニーで出来た精緻な家具(椅子やテーブル、食器だな、ベッド)がおかれ、壁面の美しい彩色タイルはスペインから呼んだ石工によって作られてもの。また、近くには、「鐘の塔」(奴隷の逃亡を監視するためのもの)があった。

少し歩くと、自由市場があり、大勢の観光客で賑わい、多くは民芸品(お人形、楽器、刺しゅうした布製品など)を売っていた。muchachas(少女たち)が、糸を抜いて刺しゅうをしていが、その器用さには驚いた。

古い歴史のあるバー「ラ・カンチャンラ」に寄り、名物のラム酒に糖蜜とレモンを加えたカンチャンラを試飲するがあまりおいしいものではない。ここでは、配給品の砂糖の小袋を観光客に売っていた。

途中、世界遺産になっているかつてのサトウキビ畑の谷「ロス・インヘニオス溪谷」を見下ろす丘に登り、吹き上げる風に耐え、かつて奴隷たちが働いた広大な大地を見下ろした。そこで、偶然にもは珍しいハチドリに会って、あわててレンズを向けるが、なかなか写すことが難しかった。

夕暮れ時に、今日の宿泊先、海岸に建つ大きな観光ホテル「アンコン」に着く。カリブ海に沈む夕日は、海面に映え、白い砂浜と碧い海は、言葉に尽くせない美しさだった。地元の人はまだ泳ぐ季節ではないが、観光客が砂浜を散歩したり、波打ち際で戯れていた(水温は22℃)。カナダの人やヨーロッパの人達には、ここは格好のリゾートの地らしい。

ホテルは、オールインクルーズ方式といって、バーやレストランは自由に利用出来るので、さまざまなカクテルを楽しむ。屋外のプールサイドでライブを演奏していたらしいが、風が強くと夜になると急に冷え、大変だったとのこと。部屋でラム酒を酌みながら

一夜を過ごすのも楽しかった。

【シエンフェゴス、サンタ・クララ、2月1日 晴れ】

朝、バスで1時間30分の世界遺産の街シエン・フェゴスに到着。

キューバでは、スペインからの独立を求めて1868年に第1次独立戦争、1895年に、第2次独立戦争が始まったが、「キューバ独立の父」といわれるホセ・マルティ（1853-1895）を記念する広場には、その銅像が据えられている。その真向かいにはカトリックの聖堂があり、10時の鐘が高く鳴り響いていた。迎えられるようにその中に入ると、若者も含め信者でいっぱいだった。そして、聖堂から見て左手はフランス様式の建物が並び、右手は音楽ホールがあり、マルティの銅像の右側にはバオバブに似た大木があり、アフリカから来た奴隷たちの信仰の樹とされていたという。そして、後方には、アメリカにスパイ容疑で拘束されている5人のキューバ人の顔と「1日も早く返せ」という国民の声が掲げられていた。

また、広場では15才の成人（選挙権は18才から）を祝うピンクのドレスを着た娘さんの写真をとっていた家族があった。今は女性の成人式だけは、親戚や友人を招いて盛大にお祝いをするとのこと。

ホセ・マルティは文字通り、生涯をキューバ独立に捧げた革命家で、カストロは、かつて「私は、マルティ主義者であり、また、十字架に死したイエス・キリストの教えと倫理に従って生きるのみである」と語っている。また、モンカダ兵営襲撃（1953年）の裁判では、「事件の首謀者は誰か」と聞かれたカストロは、ごく自然に「我らの独立の使徒、ホセ・マルティである」と述べ、「歴史は、私に無罪を宣告するだろう」と結んでいる。

広場の近くの学校には、「今もなお、チェ・ゲバラの思想は生きている」という大きな看板がかけてあった。

今日のキューバの義務教育は6・3制で、就学率は100%（就学させないと罰金がある）、大学（5年制）まで教育費は無料で、約半分の方は大学まで進学する。革命当時の識字率70%は、今は改善が進み99.7%（0.3%は高齢者）。1クラスは平均20人の児童で、サブティチャー制を取っている。国内のテレビ放送の5チャンネルの内2チャンネルが教育用に当てられている。（キューバの方は、どんどん入ってくるアメリカのテレビ番組もよく見て、楽しんでいる）

バスで、革命戦士チェ・ゲバラの眠る街サンタ・クララに行き、昼食は、今夜泊まるホテルのレストラン「ロス・カネイエス」で、例のごとく「グアンタナメーラ」や「ベッサメ・ムーチョ」等の歌と演奏を聴きながらキューバ料理のバイキングを楽しむ。

午後、チェ・ゲバラ記念霊廟、革命広場、装甲列車襲撃記念碑を見学。

キューバ国民がどれほどチェ・ゲバラ（アルゼンチン生まれ、医師、1928-1967）を敬愛しているかを深く感じさせられる。ゲバラのお墓に参拝したが、銅像には「最後の勝利まで *Hasta la victoria siempre*」という文字が刻まれており、広場には、「チェ・ゲバラのように生きよう」という大きな看板もあった。

今、日本でも「チェ、28才」、「チェ、39才、最後の手紙」などの映画が上映されているが、その興業収入は20億円を見込み、久々のヒットといわれている。それは、「苦しむ人を助けたい、未来は変えられる」というそのぶれない信念は、今の日本の若者の共感を呼んでいる。また、先日はチェの自伝的映画「モーターサイクルダイアリーズ」や「キューバ革命 50年の歴史」などがテレビ放映された。

チェ・ゲバラは、「祖国とは人民である」と言っていて、ラテンアメリカ各地の革命闘争に参加しているが、これは日本人にはわかりにくい考えと思っていたが、しかし、「原住民がヨーロッパの侵略者に殆ど虐殺された中南米では、どこでも一つの混血民族を形成しており、表面的な国名を越えてすべての国民は、皆兄弟である」という彼の演説を聞いてみると、なるほどと、うなずける。ちなみに、キューバの国民は、スペイン人とアフリカ黒人の混血（ムラートという）が37%、スペイン系白人51%、アフリカ系黒人11%、その他1%といわれている。（政府は、人種別の統計は差別につながるとして行っていないが、推計では混血が増えているという）

1959年、チェ・ゲバラを司令官とするゲリラ軍は、サンタ・クララで政府軍と市民ぐるみの最後の戦闘で、火炎瓶なども用い、伝説的ともいえる勝利を収めた。これが決定的となり政府軍は崩壊、バチスタ大統領は国外に逃亡、キューバ革命が成就した。この戦いを記念する装甲列車襲撃記念碑の広場には、5両の貨車と火炎瓶の炸裂を象徴するモニュメントがおかれていました。

その時、ちょうど24両の貨物列車（石油輸送のタンク車が多かった）がのろのろと目の前を通過していった。キューバで初めての列車を目にしたが、鉄道は主に貨物輸送に使われているとのこと。

最近では、ヴェネズエラから石油が輸入されるようになり、95%の家に電気が通じ、電灯がつき、停電時間は大いに減少したという。テレビや冷蔵庫（電気製品は中国製が多い）も普及し始めたが、一般家庭にはまだまだのようである。

サンタ・クララの街を一望するカピーロの丘に登り、眼下に街を収め、近くの野球場からは、大勢の人たちが熱戦を観戦する響きが伝わってきた。

丘の頂上にはキューバの国旗がはためいている。「その旗は、1860年代のホセ・マルティの独立戦争の時から使われているもので、5本のすじ模様は5つの主な地域の団結を表し、青い色はキューバの海と空を、白はキリスト教の純潔を示し、三角の模様は平等を表し、赤は情熱と血を示している」と説明してくれた。

再び、ロス・カネイエスに戻り、広い敷地の中には、シュロの葉で屋根を葺いたパオを思わせる民族的な洒落た建物が点在している。レストランの前にあるプールで泳ぐ人や、絵を描いたり、広大な敷地を散歩している人など、またプールサイドでキューバ音楽を聴きながら、ラム酒を飲んで、トロピカルな雰囲気を楽しむ人もいた。

夕食後、野外での女性と男性のファッションショーを見たが、物が少ないキューバでは、薄い布を染めて巻き付け、リズムカルに歩む。

【ハバナ、2月2日、晴れ】

再び高速道路でハバナに向かう。

車中、ガイドのホセさんにいろいろと聞いた。

1868年に始まった第1次独立戦争は、アメリカへの併合を求めるものであったが、ホセ・マルティらによるキューバ自身の独立をめざす1895年の第2次独立戦争は、1898年の米西戦争でスペインが敗れたことから、キューバは、1902年に400年に及ぶスペイン支配から、独立を達成した。しかし、実質的には完全にアメリカの従属国で、新憲法上にもアメリカの政治的、軍事的干渉権を明記され（プラット修正条項）、今もグアタナモには、広大な米軍の軍事基地がある（「沖縄のような」とホセさんは言った）。オバマ政権は、国際世論に押されて、その基地内にある捕虜収容所を、近く閉鎖するという。

20世紀に入り、アメリカ資本の大規模な投入により、キューバの砂糖モノカルチャー経済とアメリカ依存の経済構造ができあがり、アメリカ資本はキューバ経済を完全に支配していた。そして、キューバは、アメリカと結び付いたバチスター族を初めとする少数の金持ちが富を独占する社会となっていた。

カストロやチェ・ゲバラたちは、1953年7月26日にモンタガ兵営を襲撃するが、失敗、裁判で15年の禁固刑に。釈放された後、再び1956年12月にメキシコから「グランマ号」に乗ってキューバに上陸、シエラ・マエストラ山脈にこもり、ゲリラ戦を展開、次第に都市部も含めた圧倒的な国民の支持をえて、1959年1月に革命を達成し、今年「革命五十周年」を向かえ、独自の社会主義キューバを建設しつつある。

アメリカの経済封鎖は、1962年以来、50年近く続けられ、しかもそれを他国にも強要している異常なもので、昨年10月の国連総会では、この解除を求める連続17回目の決議は、185カ国の圧倒的支持で可決、反対はアメリカとイスラエルなど3カ国のみであった。

革命政府は、特に教育や、医療、国民の住宅や食生活などの最低生活の保障に力を入れてきた。それらにかかわる費用は、貿易や国営事業の収益で賄われており、今の段階では、一般的には、国民から税金を徴収する制度はない。

革命の後、6千人いた医者がほとんどアメリカに亡命したが、その後、7万人の医師と10万人の看護師を養成し、特に予防医療に力を入れ、120家族に1人のホームドクターの配置は、世界でも最高のレベル。5才未満の子どもの死亡率は中南米の平均の4分の1で、アメリカよりも少ない。革命当時60才だった平均寿命は、今や男75才、女76才となった。

国際医学学校には121カ国から来た3万人の学生が学んでおり、キューバは94カ国に（主にラテンアメリカ）6万人の医師を派遣している。ヴェネズエラと共同で始めた視力の回復を図る治療プロジェクト『奇跡の計画』は、患者負担はゼロで、昨年末で31カ国100万人を治療し、2016年までに600万人を目指している。

住宅は、高層アパートなどを国から安く借りたり、土地を国から借りて自分で建てる場合とがあるが、一定期間賃料を払い込めば、自分のものとなる。自分で資材を買って、1部屋ずつ建て増しして広げていくのだが、セメントなどの資材が高くて何年もかかる

という。

また、十分とは言えないが、米、小麦粉、砂糖など基本的食料品には配給制度がある。

ただ、「ドル＝兌換ペソがあれば、必要なものは何でも手に入る」とアメリカ社会とドル（一般のペソと兌換ペソとの交換比率は1：25）へのあこがれは根強い。60年代の移民は、上流階級の政治亡命者だったが、最近の移住者は「経済難民」ということができる。

政府は、いま、外資も導入して観光に力を入れて、外貨収入は砂糖輸出のそれを越えている。大西洋側の観光地には、豪華なホテルが立ち並び、ゴルフ場もあるという。カナダとイタリア、スペイン、ドイツなどからの観光客が、年間2百万人以上もキューバを訪れている。やはり、大西洋経由は距離的にも近い。（帰りの飛行機の隣の席に、カナダ在住の日本人がいたが、彼は『カナダでは、美しい自然と文化、治安もよいキューバ観光は人気があり、多くの人は4、5回は行く』と言っていた）

「キューバには、自殺はないのですか」とホセさんに聞いたら、「ありません。私が日本に留学していて、特に驚いたことは、子どものいじめと自殺です。学校での勉強はお互いに助け合っているもので、そこでのいじめなどは考えられません。それが日本のような進んだ国で、なぜ多いのか理解できません」「キューバは、今はまだ貧しいが、みんなで力を合わせて、ここまでできました。問題は、まだまだ多くありますが、みんなで頑張れば、もっとよい国になることができます。私たちは、国の指導者を信頼しています」との答えだった。

医療や教育、最低生活の保障など人間が生きていく上で必要な条件（環境）を「社会の共同の力で支え合って築いていく」のが人間社会のあるべき姿で、逆にそれらを一部の人達の「儲けや収奪（強制）の対象」にしたのでは、人間社会が破壊されていくのではないか。

カストロやチェ・ゲバラがいう「祖国か、死か」という問いかけも、この事を言っているのではないか、ここに、かつてのソ連型とは一線を画するキューバ流社会主義の原点があるような気がした。

そんな話をしていたら、ハバナの近くの入り江の美しい漁村、コヒマルに到着、レストラン「ラ・テラサ」は、ヘミングウェイの写真が飾られており、フランス人やポーランド人もいた。ここで、漁師のスープとパエジャ（おかゆ）が出てくる。魚やトマトの味で整えられて、とても美味しかった。

その後、訪ねたのは、22年間ヘミングウェイ（1899－1961）が住んでいたというフィンカ・ビヒア邸で、「キューバ国民の福祉のために」と言う彼の遺言によって、革命政府に寄贈され、今は博物館になっている。

ヘミングウェイの館に通じる小道を走ると、背の高さほどのブーゲンビリヤガ、入り口の鉄門を飾っていた。敷地の広さは約4HA、門を入れて右手にはゲストのための朽ちかけた2階家、正面の少し小高い所に中心の館があり、その隣に離れの塔のような3階建の書斎がある。館は昔は中に入って見学出来たと聞かすが、不心得の者が展示品を失敬したことにより、今は外からしか見られない。しかし、どの部屋も大きなガラスを通

して眺めると、つい最近まで生活していたように錯覚するほどだった。部屋は、入ってすぐに大きなリビングとダイニング、テーブルの上には、今宴が終わったかのように、グラスと沢山のラム酒の瓶がならんでいる。アウトドアが好きだった彼は、各部屋にアフリカでの獲物（鹿やライオンの頭）の剥製や釣り道具が飾られている。隣の書斎の棚にはタイプライターが置かれ、晩年彼は座ることが難しく、立ったままで打ったという。沢山の蔵書の書庫、そして書斎、そこには、第4番の夫人との写真が飾ってあった。客室と映写室、どの部屋もゆとりと光彩が考えてある部屋だった。

隣の細長い3階建の書斎は60匹の猫も楽しめるために建てたという。その1階には、画家が描いた肖像と子どもが彼を描いた作品が展示されていた。3階の書斎からは、一眼にして周囲が見渡され、心地よい風が吹き上がってくる。

庭に出て、階段を下り、小さなキュウリという実がなる大きな木から、ホセさんがとってくれた果実は、スターフルーツを小さくしたような5cm位のもので、甘酸っぱい味。そこから左手の方に歩くと植物園のような庭が広がる。愛犬4匹の墓、深さ3mもある大きなプール、彼を乗せてカリブ海を航海した愛用のヨット、ピラール号が展示されていた。酒好きの彼は舵を切りながらも酒を飲むことが出来るように、手元にミニバーが置かれていた。先程の館のバスルームに張ってあった彼の体重などを細かく記入したメモを見た者にとっては、彼もまた糖尿という病には勝てなかったのかという思いを強くした。

その後、映画「老人と海」の舞台になった所に行く。

目の前にその景色を見た時、なつかしさを覚え、小説の一編が脳裏に浮かぶ。見張り所も映画のままだった。そこに、ヘミングウェイがカリブの海で、釣りをしている姿と重なる。紺碧の色をたたえた海原は私たちに優しく迎えてくれた。「老人と海」の記念碑は、カリブの海に面し、彼を永遠に賛美していた。

その後、街の対岸にある、400年前に造られたモロ要塞を見学。ハバナの港を海賊から守るための大砲がずらりと並んでいる。港の入り口には鎖を延ばして海賊の侵入を防いだという。今も、夜9時になると体に響く大砲が一発、打ち鳴らされている。

それから、ラム酒を作る工程を見るために「ハバナクラブ」に行く。一階は、試飲場と売店で、階段を上がると、アフリカから輸送船で運ばれた奴隷たちへの拷問の道具を見て、身の毛もよだつようだった。サトウキビを発酵させて作るラム酒の製造過程が展示されていた。階下に下りて、細長いカウンターで年代物のラム酒を試飲した。

夜は、ヘミングウェイがよく通っていたという「ラ・ボデギータ・メデオ」で、キューバ最後の夕食を、レモンジュースの入ったラム酒のカクテル「モヒート」で、Salu!、歌と演奏を聞きながら、黒豆入りのコングリというごはんを食べる。壁いっぱい、観光客がさまざまな言語で落書きがしている。壁の上の方には、大きな文字で「世界に平和と愛を Paz y amor en el mundo」と書かれていた。

夕食後、ヘミングウェイが、その五階に滞在していた作家活動をしていたホテルを、散歩しながら見学。今も開業しており、私たちのホテルと比べるとさすがに立派、一階のロビーにしか入れなかったが、ロビーには水をたたえた池があり、天井から光がまゆば

くてらしていた。その一角では、セレブと思われる人々が、カウンターに身を寄せてカクテルを楽しんでいた。

ハバナは酒はあるが、菓子類は少ない。男ならだれでも側に寄りたくなるようなグラマーでセクシーな女性がソファーに座り、ケーキとおぼしき物を、手づかみで何個もほうばっている姿は、滑稽さを覚えた。帰りながら、富豪の館が連なる街、壁には当時住んでいた人名が書かれ、又宴の様子がフレスコ画として残されていた。

【ハバナ、農園視察後、帰国の途へ、2月3日】

当初のツアーの日程にはないが、過日、NHKで放映された農園の視察に行く。

1960年代以降のキューバの農業の特徴は、国営農場、砂糖生産、近代的農（機械化と化学肥料）の3つといわれていたが、ソ連崩壊後、アメリカの経済封鎖の下、従来の方式が続けられなくなり、いま、キューバでは、自国民の食糧生産を優先させ（ソ連崩壊前は、砂糖生産が優先で、国民の食料の7割は輸入していた）、農業資材や化学肥料や燃料がストップする中で、有機農業や準有機農業に切り替え、国営農場から効率のよい小規模生産方式への切り替えという史上初めての国家的転換を図るため、国を挙げて取り組んでいる。この事業は世界各国からも注目され、視察団も次々訪問している。

私たちが訪ねたのは、先日も日本のNHKのテレビに登場したオルガ大江さん（新潟県出身の父に持つ日系人）の農場でした。1991年の経済危機の時に、父の三郎さんの後を継いで、オルガさん夫妻は二人とも研究者（微生物学者と金属化学の研究者）でしたが、農業に転身、6人家族と3人の手伝い者で都市部での有機農業に取り組んでいる。彼女は、「El Japones」（日本人）という名前の自宅の直売所の販売もあるとのことで、案内は息子のアレックスさん（23才、農業大学1年生）でした。オルガさんは、自宅の0.5HAと国有地3HAを借りた畑で、「オルガノポニコ」と呼ばれる方式で、レタスやニンジン、キャベツ、ニンニクなどの生鮮野菜を生産していた。「オルガノポニコ」とは、地面が石灰石の土壌なので、その上に35～50cmの堆肥をまぜた土を乗せ、流失しないようにブロックや石で周囲を囲い、集約的に生鮮野菜を生産しようというもの。肥料には鶏糞や牛糞、ミミズ堆肥を交ぜて使っていました。今回の旅行に参加した川上村の農家の方から言わせれば、「品質上は、まだ改善の余地がありそうだ」とのことでしたが、オルガさんは、幼稚園や学校に納入したり、自宅の直売所の売上で、「月、1500ペソを稼いでいます。何とか農家としてやっていける今の暮らしが幸せです」と言っていた。

こうした都市農園はハバナに、8000カ所あり、オルガノポニコ方式は300カ所とのこと。政府も、国民の健康のためにも野菜を食べよう勧めているが、まだまだこの方式の普及は始まったばかりのよう。

その後、ハバナ空港へ向かう。一同、お世話になったホセさんに、心からのお礼を述べて別れを告げた。「さようなら また会う日まで Adios hasta luego」

トロントが雪のため、折り返し便の飛行機の到着が遅れたが、3時間30分の飛行で

トロントに到着、その夜は空港内のホテルに泊まる。

【帰国、2月4日、曇り、日付変更線を通して2月5日】

早朝6時にバスで空港へ行くが、なかなか飛び立たない。翼への着雪除去の作業に2時間ほどかかり、その後、北に向けて飛び立つ。飛行時間4時間、眼下に白い雪を戴いたロッキー山脈を越えバンクーバーに到着、一旦降りるが、再び搭乗して成田に向けての最後の飛行。かなり北上して北海道の方から成田に向かう。地球はやはり丸いので、北極に近いコースをとった方が経済的なのだろう。成田空港着は2月5日の午後3時40分、トロントから乗り換えも入れて20時間近くかかった。心配した荷物はスムーズに出てきた。空港職員に「おつかれさま、お帰りなさい」と言われた時は、やはり、ホッとしました。

Che Guevara

チェ・ゲバラ。1928年、アルゼンチンの中流家庭に生まれる。医師。

本名は、エルネスト・ゲバラだが、「あのね」と呼びかける「チェー」から、チェ・ゲバラとあだ名がついた。メキシコでカストロと出会い、キューバ独裁政権を倒すためにゲリラ戦に参加、革命後は国立銀行総裁、工業相を務めた。1959年、広島も訪問。

革命を世界に広げようと、アフリカや南米ボリビアでゲリラ戦を続けるが、1967年、ボリビア政府軍に捕まり、39才で処刑された。

2009・2・15

参考文献 キューバを知るための52章(後藤政子、樋口 聡)
200万都市が有機野菜で自給できるわけ(吉田太郎)
キューバに吹く風(早乙女勝元)
冒険者カストロ(佐々木 譲)

編集 キンキンツーリスト 事務局 連絡先 090-8485-1661 fax 042-385-5540